

食品流通をめぐる経済機構に関する研究

平 木 竜 雄

A Study of the Economic Organization in Connection with Food Distribution

Tatsuo Hiraki

わが国における生鮮食品の重要性はますます大きなものとなってきている。そしてこれらのものは一般に腐敗性商品として特徴づけられているが、腐敗性以外にも多くの商品的特性を有しているのがこの生鮮食品なのである。

最近の社会経済の発達は見えはらせるものがある。この社会経済の発達は生活水準を向上させその食生活をも急速に豊かにせしめてきている。そして特に果樹、野菜の生産ならびに消費は大きく伸びており、輸入食料もまた同様に伸張率を大きくしている。そしてそれらは、いわゆる商品的特性によって流通、さらにまたその価格に大きな変動を与えている。ここ数年来物価は急激に上昇しているが中でも生鮮食品の価格ははなはだしいその上昇を示しており、国民生活にとって大きな影響を与えている。したがって、この物価対策は現在国政上の大きな課題とならざるを得ない。そしてこの研究の目的はこれらの生鮮食品の商品的特性がおよぼす影響は生産過程、流通過程において経済的・機構的条件にどのように依存しているか、そしてそれから生ずる種々な問題を明確にすることではない。

ばならない。

この生鮮食品は、その生産が自然に支配されていることは、供給を不安定にし、品質の保持を困難にしている。生産物が多種類で、かつ同一種の品質がまちまちであるため、消費者の選択の幅は広く、嗜好性の影響を受け、商品間の代替性が大である。このような所に多種多様な商品の存在を許し、農業においては生産技術の進歩によって新しい品種が増大し、漁業でも、産地の拡大等により魚種は異常な増加を来している。そして貿易の完全な自由化が行なわれれば、さらにその種類は増大し、生産経済の面で大きな変化が要求されるであろう。すなわち、この生鮮食品は鮮度そのものが、商品価値であるため、自然の形を保持したまま商品とされており、多種多様の品質の異った商品に統一した規格をつけることが困難である。この規格には、形状、鮮度、味覚、包装の基準があるが、すべてに共通した鑑別、品質判定上の留意点は、新鮮度、廃棄量の多少と包装荷造りの良否である。このため、生鮮食品は現物を見て経済取引をする必要がある。ここに現状的には市場の構造ならびに経済的不明確さが露呈され、その価格の少くとも理論の根拠が薄弱となり、経験主義が殆んどそのすべてを決定するほどの重要性を持ってしまうのである。

流通過程において問題となる商品的特性はその鮮度である。つまりこの鮮度のために流通は制約され、流通機構には貯蔵冷凍、冷蔵設備が必要とされ、さらに腐敗、変形、変色による品質低下中間ロスが多くでてくるのである。この腐敗性が強いものほどその貯蔵、輸送コストが増加し、中間商人の危険負担も価格の中に大きく加えられてくる。また軟弱なために外形の保護が必要で、荷がさが大きく輸送を制約することになる。したがってさらに流通過程上で食品衛生上の負担も過大になって来ざるを得ないのである。

このような商品としての生鮮食品の特質は市場の特殊性と、流通取引の特殊性を規定し、また商品と流通機構の特殊性は、生産、輸送部門に大きな経済的価格的影響をもたらすし、それらはさらに相互に波及的效果を与えるものである。

生鮮食品の鮮度は流通範囲を規定し、その経済圏を限定するものである。鮮度、すなわち経済的またはその商品価値は時間の経過とともに低下し、やがて腐敗状態で商品価値は完全に失われてしまうのである。したがって販売は鮮度の存在する時間内に完了されなければ商品価値が失ってしまうものであるところに大きな意義を保有するし、経済的意義がある。

鮮度の低下速度を一定と仮定すると、収穫から販売

までは一定の時間内に完了されねばならない。生鮮物の流通範囲は、この時間内に輸送できる距離に限定される。経済条件を考慮すると、価格は鮮度の低下とともに下落し、輸送は距離に比例したコストを必要とする。したがって、商品として最も有利に販売出来得る流通経済圏が規定されなければならない。鮮度の低下速度を減少した場合、つまり鮮度保持の工夫（例えばコールド・チェーン）した場合について考えると、収穫から販売までの時間的制約は延長される。その効果は、流通範囲の拡大と商品価値の保存である。さらに出荷販売の時期を調節可能とし、供給量はすぐれて安定され、波及的にその価格も生産量ならびに生産コストからの経済的効果をもたらすことが出来得る。

もちろん、生鮮食品といっても水産物と農産物では、生産、流通、消費における諸条件が異っていて、生産過程、流通関係はそれぞれ様相が異っているので一般論でとらえることは困難である。しかし、価格変動の共通の本質を見極める必要が強く要請され得るところであろう。